

穂積親王の御歌一首

三八一六番

家いへにある 櫃ひつに鍵かぎ刺し 蔵をさめてし 恋こひの奴やつこが つ  
かみかかりて

三八一七番

かるうすは 田廬たぶせの本もとに 我わが背せ子こは にぶぶに  
笑ゑみて 立たちませり見みゆ

三八一八番

朝霞あさがすみ 鹿火屋かひやが下したの 鳴なくかはづ 偲しのひつつあ  
りと 告つげむ見こもがも

右みぎの歌うた二首、河村かはむらの王おほきみ、宴居うたげの時ときに、琴ことを  
弾ひきて即すなはちち先まづこの歌うたを誦よみ、以もちて常つねの行わざ  
と為なす。